

ḡrbhī́tá-

松浦 高志

1 喉音で終わる語根の過去分詞

印欧祖語において一般に喉音で終わる語根の過去分詞（過去受動分詞）は、サンスクリット語では次のようになる。なお、過去分詞では語根は一般に零階梯になる。

(1) 子音+喉音 : Ci-tá-. e.g. sthi-tá- (√sthā).

(2) i+喉音 (◌ī で終わる語根) : Cī-tá-. e.g. krī-tá- (√krī [IX]).

(3) u+喉音 (◌ū で終わる語根) : Cū-tá-. e.g. dhū-tá- (√dhū).

√grabh は、印欧祖語では *g^hrebh₂- と再構築されるので、「子音+喉音」で終わる語根ということになる (grabhi-). しかし過去分詞は ḡrbhī́tá- である。

2 第 IX 類現在

√grabh の現在形は第 IX 類であり、ḡrbh-ṅá-ti (P) / ḡrbh-ṅī-té (Ā) と活用する (VGS pp. 138–139). 接辞の弱形が -ṅī- になることから、√grabh の過去分詞が *ḡrbhī́tá- でなく ḡrbhī́tá- になることは、一見これと関連がありそうに思われる。なお、接辞の弱形が、規則的な *-ni- でなく -ṅī- となることについては (◌ī で終わっていない語根の過去分詞が Cī-tá- になることよりも) 取り上げられることがよくあり、まず Wackernagel が、強語幹と弱

語幹の母音の長さを同一にしようとする作用に起因すると説明している (AiGI.20). Jamison, ‘Quantity’ はこれに反論しているが、ヒッタイト語の鼻音接中辞の例より吉田和彦がふたたび Wackernagel の説に「帰還」させている (Yoshida, ‘Return’).

しかし Whitney, *Roots* で挙げられている過去分詞形 (ブラーフマナ文献期 [B.] くらいまでの古いものに限る) を調べると、これと関連があるわけでもないことがわかる。まず、第 IX 類現在をもつ語根は p. 214 (‘INDEXES OF TENSE- AND CONJUGATION-STEMS’) で挙げられているので、このページで挙げられている過去分詞をいくつか調べてみると、Cī-tá- となるものは、語根が ʔī で終わるものにほぼ限られることがわかる。そこで、Whitney, *Roots* にある動詞語根を第 1 ページから最終ページまですべて調べると、やはり過去分詞が Cī-tá- となるものは、語根が ʔī で終わるものにほぼ限られることがわかる。

なお、語根が ā で終わる語根からつくられる過去分詞の中にも Cī-tá- となるものが若干あり、それは延長要素 -i- を用い、-H-i- > -iH- のように喉音転置を起こした結果であると説明される¹。例：gī-tá- < √gā ‘sing’, pī-tá- < √pā ‘drink’。また、√sā ‘to bind’ の第 IX 類現在 si-nā-ti は、*seh₁- の零階梯に延長要素 -i- を付し、*sh₂-i- > *sih₂- のように喉音転置を起こしたものが新たな語根と見なされたことによってできた形と説明される (EWAia s.v.)。しかし √grabh が延長要素 -i- を用いることはないと一般に考えられている。また √hā (1) ‘leave’ の過去分詞は hī-ná- だが、これは明らかに √hā (2) ‘go forth’ の第 III 類現在 jihīte (Jamison の付しているアクセントは jihī-té) などからの影響と Jamison は考えている (‘Vocalized’, 220 と n. 14 を見よ)。√hā (2) の語源 *ḡ^heh_x- はインド・イラン語派 (とゲルマン語派?) に

¹ 松浦「延長要素 -i-」77-78.

しか残っていないので, *ḡ^hehi- を語源とする √hā (1) の中動態から派生した単語の可能性が高いが, そのように判断するためには √hā (1) と √hā (2) の意味をさらに詳しく調べる必要がある (LIV s.v. *ḡ^heH-, Anm. 1).

3 語源辞典での説明

したがって ḡrbhī-tá- となる理由は第 IX 類現在とは関係がなく, むしろ √grabh という語根そのものに理由があるということになる。

そこで *EWAia* s.v. GRABH¹ (I.505–507) を見ると, 「set 語根の, 喉音によって延長されている (?) -ī- に注意せよ」という記述が見つかり², a-grabhī-ṣma という形態や Narten, *Aoriste* を参考にすればよいことがわかる。

4 grabh- の iṣ アオリスト形

すると問題は過去分詞 (のみ) にあるのではなく, アオリスト形なども関係してくることがわかる。そこでもう一度 Whitney, *Roots*, s.v. √grabh を見ると, iṣ アオリストに ágrabhīṣma (*ágrabhīṣma でなく), ágrahaiṣam AB., ḡrhītvá AV.+ などもあることがわかる。

『アイタレーヤ・ブラーフマナ』の例なども参考にすると, 今回の問題は特に iṣ アオリストが関係しているだろうことがわかる。そこで, たとえば次のようなものを調べてみる。

- (1) *VGS* p. 380 も一応見ておくと, iṣ(-aor.) に ágrabhīṣma がある。
- (2) *VGS* の iṣ アオリストの節は §145 であり, 関係するのは b–c の項目 (p. 166) である。ここでは √grabh が, iṣ アオリストでは接続母音として通常の -i- とは異なり -ī- を用いる, という注記と, 通常の 1 人

² „Zu beachten ist durchgehendes (?) -ī- für *-H- (wohl *-h₂-) der Set-Wurzel ..., a-grabhī-ṣma u.a., Narten, Aor 110, S. W. Jamison LarTheor 225 f.“

称単数形の *á-kram-iṣ-am* の代わりに、2/3 人称の *-īś / -īt* からの影響を受けたと思われる *á-kram-īm* という形や、さらに *á-grah-aiṣ-am* となった形があることが説明されている。

- (3) Macdonell, *Vedic Grammar* の過去分詞の項目の注 (p. 404 n. 4) にこれと、*aniṭ* 語根 (印欧祖語において喉音で終わらない語根に対応する) で過去分詞が *-i-tá-* になる例が挙げられている。§575.4.b にも同様の例が挙げられている。また §529.a には *iṣ* アオリストで用いられる例外的な *-ī-* について若干の付け加えがある。

5 Narten, *Aoriste*

EWAia にあったように、 $\sqrt{\text{grabh}}$ のアオリスト形は Narten, *Aoriste*, S. 109–111 で扱われている。まず、この項目の見出し自体が „*grabhī*, *ergreifen*“ と書かれており、(アオリストに限らず) 語根が ṛ に終わるものと考えられていることがわかる。

さて、Narten の説明を読むと、次のように考えられていることがわかる。

まず、 $\sqrt{\text{grabh}}$ の能動態 *iṣ* アオリストは、古い語根アオリストから発達したと言える。3 人称単数の *agrabhīt* (*iṣ-aor.*) に加え、能動態語根アオリストの *agrabham* (RV) があるからである。さらに『リグ・ヴェーダ』以降にも能動態接続法語根アオリスト *grabhat* (AB IV.10.14) がある。*agrabhīs* と *agrabhīt* (*iṣ-aor.*) からは新たに *agrabhīm* (TS I.7.12.2) がつくられ、マントラには *agrabham* という別形も記録されている (VS, MS, KS, ŚB)。一方で本来の *iṣ* アオリスト形である *agrahaiṣam* (AB), *agrabhīṣam* (HGS) が使われているのは比較的遅い時期の文献である。

この型の *iṣ* アオリストはほかの *iṣ* アオリストと違って、語根アオリストから発達したものであり、語根を標準階梯 (*guṇa*) にして常に *-īś-* を付すことによってつくられたものと言える。しかしこれは $\sqrt{\text{grabh}}$ の *iṣ* アオ

リスト形のみが特異な形態になることを表しているのではなく、むしろこの語根自体のもつ性質によりこのようになることを表しているのではないかと考えられている。なぜなら、ふつうの *set* 語根であれば *°i* で現れるところで、*√grabh* ではすべて *°ī* で現れるからである。*iṣ* アオリストが、形態素としては語根末の喉音 (*°i*) と *s* アオリストを形成する接辞 (*°s*) の組み合わせであるとみなすことができるから、*√grabh* の語根が *°ī* で終わると考えれば、すべての形態を統一的に説明することができる。

以上のように *Narten* は説明し、関連するほかのさまざまな形態を説明している³。

凡例

- + 以降.
- 語形の一部省略.
- *A A は想定形.
- B < C B は C に由来.
- D > E D は E に変化.
- *ġ 印欧祖語の有声無気硬口蓋音.
- *H 印欧祖語の喉音 (laryngeal) の包括記号.
- *h_x 印欧祖語の喉音 (x = 1, 2, 3).
- AiG* Wackernagel, *Altindische Grammatik*.
- EWAia* Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*.
- LIV* Rix (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*².
- VGS* Macdonell, *Vedic Grammar for Students*.

ヴェーダ文献の略号

- AB** Aitareya-Brāhmaṇa. **AV** Atharvaveda.

³ 本ノートは 2022 年 12 月 19 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習 IV」(東京大学文学部) での発表資料を若干改稿したものである。

HGS	Hiraṇyakeśi-Gr̥hya-Sūtra.	KS	Kāṭhaka-Saṃhitā.
MS	Maitrāyanī-Saṃhitā.	RV	Ṛgveda-Saṃhitā.
ŚB	Śatapatha-Brāhmaṇa.	TS	Taittirīya-Saṃhitā.
VS	Vājasaneyi-Saṃhitā.		

参考文献

- Jamison, S. W., ‘The Quantity of the Outcome of Vocalized Laryngeals in Indic’,
in: A. Bammesberger (Hg.), *Die Laryngaltheorie und die Rekonstruktion
des indogermanischen Laut- und Formensystems* (Heidelberg: Winter,
1988), 213–226.
- Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg: Trübner, 1910).
——— *A Vedic Grammar for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1916).
- Mayrhofer, M., *Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen* (Heidelberg:
Winter, 1992–2001).
- Narten, J., *Die sigmatischen Aoriste im Veda* (Wiesbaden: Harrassowitz, 1964).
- Rix, H. (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben²* (Wiesbaden: Reichert,
2001).
- Wackernagel, J., *Altindische Grammatik, I: Lautlehre* (Göttingen: Vandenhoeck
& Ruprecht, 1986).
- Whitney, W. D., *The Roots, Verb-forms and Primary Derivatives of the Sanskrit
Language* (Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1885).
- Yoshida, K., ‘Return of Wackernagel: The Weak Affix *-nī-* in Sanskrit Ninth
Class Presents’, *Tokyo University Linguistic Papers*, 33 (2013), 363–373.
DOI: <https://doi.org/10.15083/00027521>
- 松浦高志「サンスクリット語文法ノート (8): 延長要素 *-i-* を含む語根に
ついて」, 梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』 (東京
大学文学部インド語インド文学研究室, 2024), 77–81.